



sapporo
education and culture hall
news

raku

A play by Thornton Wilder

OUR TOWN

Directed by Nanzan

2017.3.25 Sat. 26 Sun.



【インタビュー】

ワークショップ発表公演

音楽劇『わが町』

南参 (脚本・演出)

子供たちが照らし出す、観客一人ひとりの人生



わが町

INTERVIEW | OUR TOWN A play by Thornton Wilder
Directed by Nanzan

PROFILE

南参 (なんざん)

1997年、札幌で劇団「yhs」を結成。世の中のさまざまな物事を独自のユーモアによって切り取る脚本と、俳優たちの個性を最大限に活かした演出で評価を受けている。創りだす舞台のジャンルは幅広く、社会派的なシリアス劇から、とことんバカバカしいコメディ作品まで、どんな欲に創作活動を行っている。現在、日本劇作家協会北海道支部・副支部長。

「わが町」子ども向け演劇ワークショップ

物語のメインとなる市民の役を対象に公募し、夏のワークショップには23人の子ども達が集まりました。ワークショップでは、「札幌」という町の過去・現在を知るフィールドワークを行い、そこで発見した人々の日常にある「小さな物語」を掘り起こし、それをもとに劇づくりを体験してもらいました。時には歌い踊り、時には風景にもなる市民役の子どもたちは、演出家・スタッフの指導のもと、他社と協力しながら作品を作りあげる喜びと、音楽や演技による自己表現の楽しさを体験します。



舞台となる狸小路の100年間の変遷を紹介する南参さん。

子供たちが照らし出す、観客一人ひとりの人生

アメリカの劇作家、ソーントン・ワイルダーによって1938年に発表された『わが町』。アメリカの平凡な片田舎を舞台に、連綿と続く人々の営みや、人生の何てことのない一瞬の尊さを描き出し、ピュリッツァー賞を受賞。通常は表に出て来ない舞台監督が進行役を務める演劇手法も話題を呼び、後の現代劇に大きな影響を与えました。今も世界各国で上演され続けている不朽の名作に、札幌を代表する演出家・南参さん(yhs)と市内の小中学生23名が挑戦！見どころを南参さんに語っていただきました。

「わが町」では、誰かが生まれては死んで、そうして歴史が重なっていきというように、食物連鎖のよう大きな世の中の仕組みとして「死」が描かれているんですよ。その歴史も100年、200年というせせこましいものではなく、1000年、1万年くらいの規模で作者は捉えています。それぐらい長い時間軸の中だと僕たちが生きている時間なんて本当に一瞬だから、生死が淡々と語られていくのだけど、その感覚を子供たちに伝えるのはなかなか難しいです(笑)。

「原作の舞台を札幌に置き換えたときに意識したことは？」

原作は1901〜1913年のアメリカ、『わが町サッポロ』は1986〜2006年の札幌が舞台です。遊び心で80〜90年代のJ・POPを入れたり、食事などの文化的な部分は現代の日本に寄せました。多少不自然に感じる言い回しもあるにはあるのですが、なんでも書き変えてしまうと作品の普遍性が失われる気がしたので、原作の言葉はできるだけ残すように心がけました。観客からしてもなるべく原作のセリフを咀嚼できた方が、時代を超えて受け継がれてきたものを感じられるんじゃないかなと思っています。

「舞台監督の役はyhsの役者さんが演じますが、他は大人役も含めて小中学生が演じます。」

大人が言うのと響かない言葉も、子供が言うのとクサクと刺さってくるのがよくあるので、原作の言葉が逆にスツと心に入ることもあるかなと思います。あと頭にあったのは、数年前に自分の子供と一緒に寝ていたとき、ふと自分が小さかった頃の気持ちを思い出したときのこと。親と一緒に寝ていたときのぬくもりとか、30年間ずっと忘れていたことを思い出して、「あ、そうか、今立場が変わったんだな」って思ったんですよ。それと似たようなことが、今回の客席と舞台上で起こるんじゃないかなと期待しています。恋をして結婚して子供ができて、彼らがまた結婚して…というように、舞台上の子供たちの姿を通して、大人は自分が通過してきた人生をまざまざと見せつけられる感じがするのではないのでしょうか。

「観客が子供たちに自分を重ねてしまう」と。

結婚式の場面では、「参列者が舞台後方に向かって座り、教会内の通路は観客の方に向けて伸びている」というト書きがあって、観客も参列者として扱われているんです。ここで舞台監督は「この場面の本当の主役は舞台には全然姿を現しません」と言いますが、それってつまり、この劇が表しているのは人生そのもので、そこでは観客一人ひとりが主役なんだと言いたいんじゃないかな。

「では最後にメッセージを。」

小中学生が演じると聞くと、学芸会のようなものを連想されるかもしれないけど、それとは全くかけ離れたものが出来上がると思います。今回の子供たちだからこそ表現できるものが必ず生まれると思うので、ぜひ見に来てください。

ワークショップ発表公演

音楽劇『わが町』 作：ソーントン・ワイルダー 訳：鳴海四郎 脚本・演出：南参(yhs)

2017年3月25日[土] 16:30開場／17:00開演・26日[日] 12:30開場／13:00開演 札幌市教育文化会館 小ホール

[入場料] 全席自由 2,000円(ホールメイト1,500円、中学生以下1,000円) [出演] yhsプレイヤー 札幌市内の小学3年生～中学3年生

[チケット取扱] 教文プレイガイド / 011-271-3355 大丸プレイガイド / 011-221-3900

ダンスワークショップ発表公演

The home dance

ザ・ホーム・ダンス／ワーク・イン・プログレス

構成・演出・振付

ジャレオ オサム
砂連尾 理 [振付家・ダンサー]

共同振付

櫻井 ヒロ | 振付アシスタント
河野 千晶

The home dance

それは、なんでもない日のこと

「毎日の生活を真剣に楽しみ、日常からダンスを作る」というコンセプトのもとに、ティーンエイジャーとシニア世代の方々を中心に参加者を募集し、今回、ダンス公演『The home dance』を発表します。

家の中には様々なダンスが存在する！まさに家から飛び立とうとする世代と長年家を守ってきた選層世代。異なる二世世代の競演が新たなダンスを生み出します！

2017.2.18[土] 14:00開演(13:30開場) 札幌市教育文化会館 小ホール

全席自由 500円

チケット好評発売中 教文プレイガイド tel.011-271-3355 大丸プレイガイド(南1西3) tel.011-221-3900

※未就学児童の入場はご遠慮下さい。※車椅子ご利用のお客様は前日までに教文プレイガイドまでご連絡ください。

砂連尾 理 | 振付家・ダンサー
Osamu Jareo

大学入学と同時にモダンダンスを始める。1991年、寺田みさことダンスユニットを結成。93年～94年、ニューヨークにダンス留学。02年、「TOYOTA CHOREOGRAPHY AWARD 2002」にて、「次代を担う振付家賞」(グランプリ)、「オーディエンス賞」をW受賞。04年、京都市芸術文化特別奨励者。08年度文化庁・在外研修員として、ドイツ・ベルリンに1年滞在。近年はソロ活動を中心に、ドイツの障がい者劇団ティクバとの「Thikwa+Junkan Project」(ドラマトゥルク:中島那奈子)、京都・舞鶴の高齢者との「とつとつダンス」及び「とつとつダンスpart2-愛のレッスン」、音楽家・野村誠との「家から生まれたダンス」、宮城県名取市開上(ゆりあげ)の避難所生活者の取材を元にした「猿とモルターレ」、濱口竜介監督映画「不気味なものに肌を触れる」への振付・出演、びわ湖ホール・オペラへの招待 マスネ作曲 歌劇「ドンキホーテ」の振付など多方面に精力的な活動を展開している。また、「とつとつダンス」については、初の著作「老人ホームで生まれた(とつとつダンス)―ダンスのような、介護のような―」(晶文社)としても発刊したほか、創作の際の言葉が驚田清一「折々のことば」/朝日新聞連載で紹介されている。立命館大学、神戸女学院大学、京都精華大学、天理医療大学非常勤講師。

「日常からダンスを作る」というコンセプトのもとに、講師と受講生が対話を重ねながら共にダンスを創作中。



主催：札幌市教育文化会館(札幌市芸術文化財団) 企画協力：京都芸術センター(公益財団法人京都市芸術文化協会) 後援：札幌市、札幌市教育委員会

教育文化会館は、おかげさまで来年度40周年

KYOBUN 40th Anniversary

昭和52年にオープンした札幌市教育文化会館は、来年度開館40周年を迎えます。

多様な機能を持つ大ホール、小ホールでは国内外の優れた舞台芸術公演のほか、市民の皆様の芸術文化活動の発表と交流の場として、また各研修室、ギャラリーでは、市民の皆様の様々な芸術文化活動、講演、研修など、教育文化会館の持つ多機能性を存分にご活用してご利用いただてまいりました。

40周年を迎え、札幌市教育文化会館では、古典芸能から演劇まで幅広いジャンルにわたり記念事業を予定しております。今後も市民の皆様に芸術文化を通じて、豊かな生活を楽しんでいただける事業を実施してまいります。



開館時の写真

昭和52年、周りの樹木もまばらな、開館当初の模様。まだ、大ホールが建設されていません。(大ホールは、第2期工事として昭和55年にオープンしました。)



現在の写真



オープン事業
チラシ

完成記念公演/歌舞伎
日本伝統芸能
「狂言」鑑賞のタベ



完成記念公演/文楽



斎藤 清 (1907～1997)
Kiyoshi Saitoh

福島県会津に生まれ、4歳のときに夕張に移住。小樽や札幌で看板書きの仕事をしながら1931年まで北海道で過ごす。独学で独自の木版画技法を確立し、「現代版画」の先駆けとなった。日本の美術館だけでなく、海外の美術館にも広く作品が所蔵される。



慈愛

[設置:1984年(3階廊下)]

戦後初の国際美術展「サンパウロ・ビエンナーレ」(1951年)で、版画部門で日本人初の受賞を果たした斎藤清は、国際版画展への招待出品、当時の日本の美術界で異例と言える海外での個展開催など、数々の実績を残しました。84年には札幌市民ギャラリーで250余点に及ぶ大規模な個展を開催。『慈愛』はそのときの出品作です。斎藤版画独特の木目をはじめとするマチエールや、モダンリズム感覚が冴え渡る構図は円熟味を増し、お地藏さんのおおらかなデフォルメや落ち着いた色調どこかユーモラスな表情が見る人を安らいだ気分誘う一枚です。

国際美術界に名を馳せた「現代版画」の先駆け

藤谷 真由美から指名→

さっぽろ 演劇人

No.009

つる まき けい た
弦巻啓太

弦巻楽団

一緒に切磋琢磨することで生まれる
グループを見つけた

弦巻啓太 プロフィール

高校在学中に脚本家、演出家として活動を始める。2003年「弦巻楽団」を旗揚げし、2006年正式に劇団として始動。札幌座ディレクター、扇谷記念スタジオシアターZOO代表幹事(芸術監督)。

SAPPORO ENGEKIJIN

KEITA TSURUMAKI

1月の札幌演劇シーズン「ユークヤント・ハリ・ラブ！」を皮切りに、新作「サウンス・オブ・サイレンシイズ」(札幌・東京、若手演出家コンクール受賞作)四月になれば彼女は彼は(韓国・三重・京都・東京・北九州)、10周年記念公演第一弾『果実』(札幌・帯広)、第二弾『裸足で散歩』(札幌)と、まさに「弦巻楽団・イヤ」と言える1年だった2016年。主宰の弦巻啓太さんに作品づくりについて伺いました。

——2016年の公演数はすごいですね。

「その他に3、7、12月に演劇研究講座の発表公演をして、9月には講師を務めているクラーク記念国際高校クリエイティブコースの発表公演もありました。2月には札幌座公演『亀もしくは』に出演もしました(笑)」

——演劇研究講座の受講生は初心者が多いですか？

「芝居未経験の中高生が受講してくれて、彼らが弦巻楽団の本公演に出ることも多いです。2017年3月の発表公演は、札幌の役者さんも交えて作品づくりをします。劇場の使い方も含め、初心者や中高生にいろいろなことを伝えていきたいです」

——受講生と作品づくりをする面白さは？

「2016年3月の発表公演は、初心者も含めて演技に対する考えがバラバラな人たちとの制作

だったけど、お客さんと演者の間で立ち上がる劇空間がすごくいい形で見えて手応えを感じました。演劇っていろんな道があって、芸を極めたプロフェッショナルな人間だけが上ることのできるステージもすごいと思うし、そうやってできる作品は魅力的で価値あるものだと思う。でも、どちらかというと僕はそうじゃない人たち、そういうことをできない人たちによってつくられた演劇に、魅力と価値を感じています」

——弦巻作品を東京の役者さんで見たいと思つこともありますか。

「でも、それだと東京でできることじゃなくて思つちゃう。そうではなくて、例えば今は技術が劣っていても不器用でも、札幌の人たちだけで切磋琢磨することで生まれる、バンドのグルーヴみたいなものを模索する道があると思つていて。そのためには切磋琢磨するための基盤をしっかりとさせる必要があって、劇団を一般社団法人化したのもそういった流れです」

——客層が広がっているのは、そういった姿勢も評価されているのかもかもしれませんね。

「ありがたいことに10年以上見続けていると、長年通つてくださる方が、僕らくらいに観客数で言ったらちょっと珍しいくらいたくさんいるんです。自分の作品に流れる一貫性みたいなものを信頼して見に来てくれているのかなと思うと、今後も誠実な作品づくりを続けたいですね」

◎次回公演情報 | 札幌演劇シーズン 2017-冬 弦巻楽団#27「君は素敵」

◎日程：2017年2月18日(土)～25日(土) ◎場所：シアター ZOO

【撮影場所】あけぼのアート&コミュニティセンター